

漢文教材としての菅茶山

——「宿生田」「冬夜読書」教材化の背景——

小金澤 豊

一 はじめに

日本人の手になる漢文、いわゆる日本漢文の位置づけが学校教育の中でなされたのは、最近のことである。「高等学校学習指導要領 国語」では、平成元年以来、古典教材の中に日本漢文を含めることが明記されるようになった。

今、日本漢詩に限定してその教材数を見ると、実際の高等学校教科書に日本漢詩の教材として採られているものとしては、菅茶山「冬夜読書」と広瀬淡窓「桂林莊雜詠示諸生」、それに夏目漱石「題自画」の三詩が際立って多い。とくに茶山と淡窓の二人については、明治期以来、漢文教材として取り上げられることが多かった。

明治期から昭和の終戦をはさんでの戦後期、そして平成の現在へと、長期にわたって茶山の詩は、漢文教科書教材として採られ続けている。しかし、教科書編集の上から見ると、その扱われ方には、明治から昭和二十年の終戦までの時期と、

それ以降の時期とでは、明らかな違いが見られる。

ところで、淡窓の「桂林莊雜詠示諸生」は、漢文教材として明治期から多く見られるのに対して、茶山の「冬夜讀書」は、戦後になってから目立ち始める教材である。明治期から終戦期までの教材としての茶山詩では、「宿生田」が目立っている。筆者は、かつて淡窓詩の教材化について論じたことがあるので、本稿では、とくに漢文教科書教材としての茶山詩について、明治から終戦を境としてその扱われ方が大きく変化した事情を、とくに、「宿生田」「冬夜讀書」という二詩を取り上げ、教材化の背景について考察する。

二 教材としての「宿生田」

宿生田

生田に宿す

千歳恩讐両不存

千歳の恩讐 両つながら存せず

風雲長為弔忠魂

風雲長へに 為に忠魂を弔ふ

客窓一夜聴松籟

客窓 一夜 松籟を聴く

月黒楠公墓畔村

月は黒し 楠公墓畔の村

右は、「宿生田」詩である。この詩は、戦いに敗れた楠木正成ゆかりの地を訪ねた茶山が、かつてこの地で起きた攻防に思いをはせる内容であるが、この詩の教科書教材としての扱われ方には、顕著な特徴が見られる。ここで問題にする扱われ方とは、「宿生田」詩が、どのような意図の下に教科書教材として編集されてきたかということである。教科書教材は、いくつかの教材を組み合わせながら編集することで、教育の達成目標に照らし合わせて、生徒に一定の教育的効果を与えることを目標として選定される。より鮮明な印象を残すためにも、詩教材なら詩教材が、一篇だけ単独でひとつの単元を構成するということはほとんどない。同様の教育的効果を及ぼすことを目的とした他の教材と組み合わせ、関連付けながら指導できるように構成編集がなされるというのが一般的である。

では、「宿生田」詩による教育的効果とは、どのようなものであったか。この詩が漢文教科書教材として採られたのは昭和の終戦期までであるが、そういう時期的な問題との関連性はあるのか。

それらの問題を考えるときに見落とせないのは、明治三十五年二月に出された「中学校教授要目」である。ここには、「国語及漢文」科の「講読ノ材料」例として、「頼山陽ノ日本外史」が第二学年以降の指導すべき教材例として明示されている。この教授要目を受け、実際の教科書での「宿生田」詩との組み合わせを確認する中から、その扱われ方の輪郭が浮かびあがってくる。

(一) 簡野道明・明治書院の教科書から

頼山陽の『日本外史』といえば、戦前までの皇国史観が連想されるが、茶山の「宿生田」詩は、山陽の漢文教材と抱き合わせの形で教科書教材に採られている例が、非常に多く見られる。

次は、正成をはじめとする南北朝の争いを題材としたものが、教科書上でどのような形で教材化されているのかということについて調査した結果を表にまとめたものである。まず調査対象とした教科書は、明治書院から出されている漢文読本で校訂者は簡野道明の教科書（東書文庫所蔵）である。これらの教科書は、ある程度長期的に継続して世に出されたものであるところから、教材選択の傾向が時間を追ってわかることから取り上げることにしたものである。時期的には、明治三十七（一九〇四）年から昭和六（一九三一）年までの二十七年間に出された十一種類である。

【表①】

教材	作者	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
宿生田	菅茶山				卷二	卷二	卷二	卷二	卷二	卷二	卷二	
湊川之戦	頼山陽	卷二	卷二	卷二	卷二	卷二	卷二	卷二	卷二	卷二	卷二	
題楠公訣子図	頼山陽	卷二	卷二	卷二	卷二	卷二	卷二	卷二	卷二	卷二		
児島高德勤王	頼山陽					卷二	卷二					
正行忠節	頼山陽					卷二						
笠置之対	頼山陽						卷二	卷二	卷二	卷二		
赤阪城守	頼山陽						卷二	卷二	卷二			
楠氏論	頼山陽	卷三	卷三	卷三	卷三	卷四	卷四	卷四	卷四	卷四	卷三	
題児島高德題桜樹図	斎藤一徳						卷二	卷二	卷二			
高德勤王	青山延于						卷二	卷二	卷二			
謁楠公墓遊須磨明石記	斎藤正謙				卷二	卷二	卷二	卷二	卷二	卷二	卷二	

【教科書番号と教科書名】

- 1 『新編漢文教科書』五冊 国語漢文研究会編 簡野道明校訂 明治三十七年
- 2 『新編漢文教科書』五冊 訂正再版 国語漢文研究会編 簡野道明校訂 明治三十八年
- 3 『改訂新編漢文教科書』五冊 改訂版 国語漢文研究会編 簡野道明校訂 明治三十九年
- 4 『再訂新編漢文教科書』五冊 国語漢文研究会編 簡野道明校訂 明治四十二年
- 5 『新編漢文読本』五冊 簡野道明編 明治四十四年
- 6 『校訂新編漢文読本』五冊 校訂再版 簡野道明編 大正二年
- 7 『修訂新編漢文読本』五冊 修正版 簡野道明編 大正五年
- 8 『修訂新編漢文読本』五冊 修訂再版 簡野道明編 大正六年
- 9 『改修新編漢文読本』五冊 改修版 簡野道明編 大正十年
- 10 『新修漢文』五冊 訂正版 簡野道明編 昭和五年
- 11 『新修漢文』四冊 訂正版 簡野道明編 昭和六年

表①から、漢文教科書教材における「宿生田」詩の特徴として、次のようなことが言える。

「宿生田」は、明治四十二年から昭和五年までの教科書の巻二に教材として取られているが、それは、この詩だけを単独で載せたものではなくて、頼山陽の「湊川之戦」など他の南北朝の争いを題材とした作品と併せて教材化されている。とりわけ、明治四十四年以降の教科書では、南北朝関連教材が増加していることが確認できる。これは、日清、日露戦争を経て第一次大戦に向かおうという当時の国際的な環境の中で、忠臣楠公というものの称賛を強調することによって、国民の意識を高揚しようという意図から編まれたものであると考えられる。

なお、同じように楠木正成を題材にした教材でも、頼山陽の「楠氏論」が巻三で扱われているのは、明治三十五年に出された「中学校教授要目」の「国語及漢文」「第三学年」の「漢文」の項目に「前学年ニ準シ又我国作家ノ論説文ヲ加フ、

例へハ頼山陽ノ日本外史ノ叙論ノ類」とあるのに基づいたものである。

こうした特徴は、明治書院以外の漢文教科書でも顕著に現れているものだろうか。もう少し検証を続けることにする。

(二) 服部宇之吉編集の教科書から

次に調査するのは、服部宇之吉の編集による漢文教科書である。

服部宇之吉は、明治四十五年三月二十九日付官報第八六三〇号掲載の「漢文教授ニ関スル調査報告」作成の中心者であり、当時の漢文教育を考えると、外すことのできない人物である。服部の編集による漢文教科書は、明治三十年代後半から昭和期までの長きにわたって出版された。当時の漢文教科書というものの編集傾向を考える上で、検討する必要がある教科書であるという判断に基づき、検証の対象として扱う。

【表②】

教材	作者	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
宿生田(詩)	菅茶山	卷三	卷三	卷三	卷三					卷二	卷二	卷二
楠氏論(文)	頼山陽	卷三	卷三	卷三	卷三							
湊川之戦(文)	頼山陽			卷三	卷三	卷二	二卷	二卷	二卷	卷二	卷二	卷二
湊川(文)	安積 信	卷三	卷三									
過新田義貞墓(文)	新宮 碩	卷三	卷三									
冬夜読書(詩)	菅茶山			卷三	卷三							

【教科書番号と教科書名】

- 12 『漢文読本』十冊 法貫慶次郎編纂 服部宇之吉校閲 元元堂書房 明治三十七年
- 13 『漢文読本』五冊 訂正再版 法貫慶次郎編纂 服部宇之吉校閲 元元堂書房 明治三十八年
- 14 『漢文読本』五冊 訂正三版 法貫慶次郎編纂 服部宇之吉校閲 元元堂書房 明治三十八年
- 15 『改訂漢文読本』五冊 修正再版 法貫慶次郎編纂 服部宇之吉校閲 元元堂書房 明治三十九年
- 16 『服部漢文新読本』五冊 訂正再版 服部宇之吉編 富山房 明治四十五年
- 17 『大正服部漢文新読本』五冊 訂正再版 服部宇之吉編 富山房 大正三年
- 18 『改訂服部漢文新読本』五冊 訂正三版 服部宇之吉編 富山房 大正五年
- 19 『改訂服部漢文新読本』五冊 訂正四版 服部宇之吉編 富山房 大正六年
- 20 『三訂服部漢文新読本』五冊 訂正五版 服部宇之吉編 富山房 大正十年
- 21 『三訂服部漢文新読本』五冊 訂正六版 服部宇之吉編 富山房 大正十一年
- 22 『改訂服部漢文新読本』四冊 改訂版 服部宇之吉編 富山房 昭和二年

調査対象とした服部宇之吉編集の漢文教科書は、明治三十七年から昭和二年までの二十三年間のものである。元元堂書房の漢文教科書では、茶山の「宿生田」詩と山陽の「楠氏論」が完全に組み合わされて一セットになっていることがわかる。また、富山房の漢文教科書でも、同じく山陽の「湊川之戦」が組み合わされており、茶山の「宿生田」詩が単独で載せられているということはない。つまり、ここでも忠臣楠公の事跡を強調するための教材編集が意図されているものと認められる。

(三) 金港堂書籍の教科書から

漢文教科書における「宿生田」詩の扱われ方を考える上でもうひとつ、金港堂書籍から出されたものを見ていきたい。

金港堂書籍は教科書出版の最大手とも言える存在であり、教科書の出版点数が多く、また、金港堂の教科書を採択する府や県も多かった。⁽²⁾ 金港堂から出された教科書を検討対象に加えることは、この出版社の教科書を用いて学習した生徒たちがそれだけの広範囲に及ぶことから、必要と判断されるからである。なお、こちらは編者が一人の人物というように一貫しているわけではない。それは、編者の如何に関わらず、教科書出版社の編集方針や意図を示しているものと判断できることから、教材選択の傾向をうかがい知ることのできる典型のひとつとして検証対象とした。

【表③】

宿生田(詩)	菅茶山		23
楠氏論(文)	頼山陽	卷五	24
冬夜読書(詩)	菅茶山	卷二	25
		卷二	26
		卷三	27
		卷五	28
		卷三	29
		卷五	30
			31
			32
		卷二	33
		卷三	34
		卷三	35
		卷四	36

【教科書番号と教科書名】

- 23 『漢文読本』九冊 中根淑編 明治三十年
- 24 『漢文教科書』五冊 秋山四郎編 明治三十四年
- 25 『漢文教科書』五冊 訂正再版 秋山四郎編 明治三十五年
- 26 『新体漢文読本』五冊 訂正再版 内堀維文編 明治三十六年
- 27 『漢文読本』十冊 秋山四郎編 明治三十八年
- 28 『第一訂正漢文教科書』五冊 訂正三版 秋山四郎編 明治三十九年
- 29 『漢文読本』五冊 訂正再版 秋山四郎編 明治三十九年
- 30 『中学漢文読本』五冊 市村瓚次郎編 明治四十二年

- 31 『中学漢文読本』五冊 訂正再版 市村瓚次郎編 明治四十三年
- 32 『中学漢文読本』五冊 訂正三版 市村瓚次郎編 明治四十三年
- 33 『重修中学漢文読本』五冊 重修五版 市村瓚次郎編 大正元年
- 34 『重修中学漢文読本』五冊 重修六版 市村瓚次郎編 大正二年
- 35 『改修中学漢文読本』五冊 改修八版 市村瓚次郎編 大正六年
- 36 『新訂中学漢文読本』五冊 新訂十版 市村瓚次郎編 大正十二年

本稿で扱う金港堂書籍の漢文教科書は、明治三十四年から大正十二年までの二十二年間に出版されたものである。この間に教材化された菅茶山の「宿生田」詩はわずかに一回だけであり、「冬夜読書」も過去に二回、採られたことが確認できる。他の金港堂書籍の漢文教科書掲載の菅茶山の詩は、「花月吟」「題鍾馗図」の二首が『漢文読本』（明治三十年）に見られるだけであり、茶山作品の少なさが感じられる。ちなみに、頼山陽の「楠氏論」は九回載せられていることが確認できた。教科書の編集者や教科書会社の教材編集の方針の違いが感じられるものである。

これまでに、簡野道明編集の明治書院のもの、服部宇之吉編集のもの、そして金港堂書籍のものという三つ柱を立てて、漢文教科書上の「宿生田」詩の扱われ方を見てきた。金港堂書籍では「宿生田」詩の掲載は例しかなかったが「楠氏論」は数多く採られていたことからわかるように、南朝に関する文章の教材化がなされている。簡野道明と服部宇之吉の編集のものでは、この詩が単独で扱われたことはなく、いずれも、他の南朝関連の文章と併せて一緒に載せられていたということが確認できる。

この背景には、当時の我が国が目指した方向性と大いに関係がある。

一八九〇（明治二十三年）年に出された教育勅語は学校生活の中に次第に強く浸透するようになり、一九一一（明治四十

四) 年の「改正中学校教授要目」の「修身」では、改正前までは存在しなかった「教育ニ関スル勅語」の項目が立てられ、そこには「勅語ノ全文ニ就キテ丁寧慎重ニ述義シ且之ヲ暗誦・暗写セシムヘシ」と、生徒に教育勅語を「暗誦・暗写」することを課すようになってきた。⁽³⁾

これより早い明治十四年六月に文部卿福岡孝弟の名で出された「小学校教員心得」には、「尊皇愛國ノ志氣ヲ振起シ風俗ヲシテ淳美ナラシメ民生ヲシテ富厚ナラシメ以テ國家ノ安寧福祉ヲ増進スル」という文言が見られる。そして、「尊皇愛國」の典型とされた人物が、『太平記』中に活躍する楠木正成であった。明治十四年の「小学校教員心得」に先立つこと一年、明治十三年には巡幸中の明治天皇は楠木正成に正一位の位を贈っている。⁽⁴⁾

このような時代の要請を受けて、漢文教材としての「宿生田」詩は、忠臣正成を賞賛する編集の一端を明らかに担っているものと言える。「楠氏論」の言うところの「其大節巍然与山河並存、足以維持世道人心於万古之下。」という正成称賛の補完的な教材という役割をこの詩が果たしているものとして位置づけることができる。

そして、昭和の戦後期に入ってから、「宿生田」が教科書教材として採られたのは、『漢文』巻三(秀英出版・昭和三十年)と『漢文新編』下巻(開隆堂・昭和三十二年)の二例を数えるのみで、それ以降は一度もなくなり現在に至っている。

三 詩集の中の「宿生田」詩について

では、茶山のもとの詩集においても、「宿生田」は楠公礼賛の趣が色濃い詩であると言えるだろうか。

そもそもこの詩は、寛政六(一七九四)年、茶山四十七歳の時の作である。この年の三月十五日、妻宣らに伴い旅に出た。⁽⁵⁾

この旅の主な行程は、備前―播磨―舞子―生田―浪華―河内―吉野―鈴鹿―伊勢―志摩―鳥羽―二見―清洲―関が原―近江―彦根―石山―栗津―京都である。⁽⁶⁾

「備前路上」に、「以下五十九首係北遊客中所得」とある通り、この旅の中で茶山の作った五十九首の詩が、『黄葉夕陽村舎詩』巻四の中に収められている。

生田には、湊川の合戦で足利尊氏の軍勢に敗れて自害した楠木正成の碑が徳川光圀の手によって建てられており、名高い古戦場である。

「千歳の恩讐」というのは、足利尊氏と楠木正成の軍勢のことを指す。この戦いがあったのは一三三六年のことで、敵味方に分かれて戦った軍勢も、茶山が訪れた今となっては「両つながら存せず」、つまり、この地で戦った両軍ともに、今ではもう存在しないのだという茶山の詠嘆が感じられる。この生田の地は、楠木正成が戦死した地で楠公祠が建てられており、元禄四年に水戸光圀が朱舜水の撰文による碑を建てているから、茶山の旅の折にはすでにこの碑は存在していた。明治になって湊川神社となり、正成の忠烈を褒揚するようになったという場所である。⁽⁷⁾

茶山の楠木正成に対する思いをうかがい知ることができる材料として、『黄葉夕陽村舎詩後編』巻八に載せられている「楠公墓下作并引」がある。これは文政元（一八一八）年、茶山七十一歳の時の作である。森鷗外はこの詩を引きながら、「茶山は高氏を新莽視してゐる。能くこれを防止した正成等は単に南朝の忠臣たるのみではない。（略）茶山は南北合一後の帝系の永続にも、正成等が与つて力あるのだとおもつた。」というような正成に対する評価を、茶山が下していたということを書いている。⁽⁸⁾

ところで、右のような楠木正成観を茶山が持っていたとしても、「宿生田」詩が正成賛美をことさらに強調したものであ

るという見方はあてはまらない。この「宿生田」詩は、「北遊歴」の旅行中にものにした五十九首という一連の詩の中に配された一首であるということを考慮する必要がある。このことは、『黄葉夕陽村舎詩』巻四の「備前路上」という詩題の下に「以下五十九首係北遊客中所得」とあることから知ることができる。この巻四では、旅の途上で詠んだ詩を行程順に並べ、その四番目にこの詩が置かれているのである。すなわち、「宿生田」詩は、あくまでもこの五十九首の中の一首であるという見方を、忘れてはならない。

こうした一連の詩に対して、頼山陽の「諸編歴叙可当風土記」という評語が「志州路上二首」の箇所にあるが、これは簡潔にしてかつ的を射た内容の評であると言える。また、この詩には、「有不尽之感」という六如の評語がある。南北朝の争いの中心勢力であった楠木正成の軍と足利尊氏の軍。かつてあれほど争った両軍とも、時の流れの彼方に消えてしまい、今では何も残っていない。ただ、当時の面影を宿すものとして、楠正成を称える碑だけが、この生田に残るだけだ、というわけである。

すなわち、「宿生田」の詩は、ことさらに楠木正成の功績を讃えた詩であるというわけではなく、旅で訪れた各地の風景や土地の歴史や様子を詩の形式で表現した、一連の作品の中のひとつとであると見ることができる。それはあたかも「風土記」のような雰囲気を与えるような仕上がりだというのだ。このような、もともとの詩集の中での本来の配置を見過ごしてはならない。

このように見てくると、漢文教材としての「宿生田」は、『黄葉夕陽村舎詩』巻四の中での配置の趣と雰囲気を異とする印象を、読む者に与える。このことは、教科書教材としての編集意図が、楠木正成を祭り上げることによって当時の忠君愛国的な徳目を強調し、賛美することにあつたという背景を明確に物語っている。

その結果、漢文教材としての「宿生田」詩は、茶山が本来の詩集の中で意図したところとは異なったものとなってしまった。

四 教材としての「冬夜読書」

冬夜読書 冬夜 書を読む

雪擁山堂樹影深 雪は山堂を擁して 樹影深し

檐鈴不動夜沈沈 檐鈴 動かず 夜沈沈

閑収乱帙思疑義 閑かに乱帙を収めて 疑義を思へば

一穗青灯万古心 一穗の青灯 万古の心

『黄葉夕陽村舎詩』後編卷三

「冬夜読書」の詩が漢文教科書教材として現れるのは、戦後になってからが初めてのことではない。『新編漢文教科書』（明治書院・国語漢文研究会編・簡野道明校訂・明治三十七年）に教材として採られている。けれども、その後、昭和の終戦までの明治書院の漢文教科書に「冬夜読書」が現れることはない。また、この明治三十七年版では、この前後に採られた教材を見ると、宋の朱熹の「偶成」、広瀬淡窓の「桂林莊雜詠示諸生」、そして「冬夜読書」という三つの作品が続いて載せられていることが確認できる。

「偶成」には有名な「少年易老学難成」の句がある。「桂林莊雜詠示諸生」は、各地から集まって淡窓の桂林莊に学ぶ若

者の姿の描写がある。そして冬の夜に書物をひもとく姿を描いた「冬夜読書」。この三作品は、いずれも読書や学問をテーマにしたものである。中でも、淡窓の「桂林莊雜詠示諸生」と茶山の「冬夜読書」は、勉学を詠み込んだ詩の双璧である。

菅茶山の「冬夜読書」と、勉学の詩の双璧を為すのが、廣瀬淡窓の「桂林莊雜詠示諸生」其四である。⁽⁹⁾

勉学に励む若者が読む作品として、教科書に教材として載せる詩としては、まことにふさわしいものと言える。

明治から昭和終戦期までの、これ以外の漢文教科書にけおる掲載状況は前章の表で見たとおりである。二元堂書房の『漢文読本』では明治三十八年の版に見られ、金港堂書籍の『漢文教科書』では明治三十五年の版に見られるだけである。教科書教材としての「冬夜読書」は、明治から昭和終戦期までは数多く取り上げられることのなかった作品だったのである。

それが、戦後になるとまったく違った様相を呈してくる。「宿生田」が戦後ほとんど姿を消したのに対して、「冬夜読書」は漢文教科書上でなじみ深い教材となっていく。

戦後期と一口に言っても、その間に出された教科書の種類は多岐にわたっており、教科書会社についても一定していない。そこで、教科書教材としての「冬夜読書」の採られ方を見るために、戦後の中でもいくつかの時期を抽出して、その時点における「冬夜読書」の採られ方を見ることで、大体の傾向をつかむことにする。



一九六六（昭和四十一）年には、七種類的高等学校教科書に「冬夜読書」が掲載されており、この数は広瀬淡窓の「桂林莊雜詠示諸生」が日本人の漢詩教材として最多の十三に次ぐ数である。⁽¹⁰⁾

一九九七（平成九）年になると、六種類の教科書に教材として採られており、淡窓の「桂林莊雜詠示諸生」と共に日本人漢詩教材の第一位になっている。⁽¹¹⁾

二〇〇〇（平成十二）年では、九種類の教科書に教材として採られ、「桂林莊雜詠示諸生」の八種類を上回って最多の掲載となっている。⁽¹²⁾

そして、現行の高等学校古典（漢文）の日本人の漢詩教材としては、淡窓の「桂林莊雜詠示諸生」の九種類、漱石の「題自画」の八種類の教科書教材に次ぐ六種類となっているのは、次の表の通りである。この三首は、いずれも読書や学問に打ち込む姿を詠んだ内容である。つまり、読書や学問といった見地からこれらの日本人漢詩作品が教材としてふさわしいものと判断されたという教科書編集の意図が感じ取れる。すなわち、茶山のこの詩は、読書や学問に対する姿勢が詠まれた内容が教材としてふさわしいという観点から、漢文教材として取り上げられるようになったと判断できる。

【表④】

教科書番号と会社名	教科書名	冬夜読書	桂林雜詠	題自画
001 東書	新編古典		○	○
002 東書	精選古典		○	○
004 東書	古典 漢文編		○	○
006 三省堂	古典 漢文編		○	○
008 教出	古典 漢文編			○
010 教出	精選古典 漢文			
011 大修館	古典1		○	○

教科書番号と会社名	教科書名	冬夜読書	桂林雜詠	題自画
012 大修館	古典2			
013 大修館	精選古典			
014 大修館	新編古典		○	○
015 明治	精選古典			○
016 明治	新編古典		○	
017 右文	古典			
018 右文	新古典			
019 筑摩	古典			
020 旺文社	高等学校古典		○	
022 第一	高等学校古典漢文編	○		○
023 第一	高等学校標準古典	○		○
025 桐原	高等学校古典漢文編	○	○	○

ところで、茶山と読書といえば、頼山陽の「茶山先生行状」に、茶山の母佐藤氏の子供に対しての教育姿勢について触れている箇所がある。山陽が、「佐藤氏又喜誦国史能訓導其子」と記しているように、子供たち（すなわち茶山も含めた兄弟たち）に国史を暗誦してみせながら教育をするほど学問のある女性を母として持ったのが茶山であった。「茶山先生行状」は続けて、「先生少小善病而喜読書作詩」と言っている。幼い頃病気がちであった茶山は、やがて自然に読書を好むようになっただけというのである。これは、茶山の幼少期における読書環境を知る上で参考となる資料である。

ところが、若き日の茶山は、そのまま順調に読書生活に入ったわけではない。よく引かれる例であるが、自らを省みながら、神辺という宿場町が持つ環境の影響もあり、遊びごとに染まった時期があったことを、次のように回想している。

神辺と申処ことの外悪風俗之処にて、村にて歴々なと申てはかまきありき候人までみな博徒ニ候、われもあやしまず、人もゆるし、親戚も見のかし候故、わたくしなともはたち計迄ハはくちもうち富第一をもかひ候ほとニ候へハ、酒色などの悪行ハいふことをまたす候、其中ニふとはいかい発句てふ物をいたしおほへ候、それよりうた詩なとすこしツツ読書にむかひ候⁽¹³⁾

当時の宿場であった神辺は、宿場ゆえに雑多な人間の出入りが多い土地柄だった。自然、風紀も乱れていった。きちんと袴を着けた身分の者までが博徒であったというのである。そんな環境下にあった茶山は、そういった影響から二十歳ぐらゐの頃には博打に手を染めるような生活を送っていたらしい。それでも、俳諧の発句に出会ってからは、少しずつ読書をする生活が身についていったようである。茶山が、このような生活を送ってしまったという自らの反省の上に立ちながら、日々、若者たちと共に読書生活を送っていたことは、想像に難くない。

このような茶山の好学的な生活も、彼の詩作品が、教科書教材として採られてきたことの要因の一つに数えあげても良いのではないか。

五 詩人としての菅茶山

『東瀛詩選』の中で、清の兪樾は、菅茶山について、次のような紹介をしている。

菅茶山、字礼卿、号茶山。備後人。著有黄葉夕陽村舍詩八卷。

礼卿詩各体皆工。而憂時感事之沈往々流露。行間亦彼中有心人也。其開元琴一首借題抒憤可想見其懷抱七律中如耕牛龍盤等題皆摘首句二字為題實非題也。命意所在亦不可揣測者然語意悲壯氣骨開張不失為名作。⁽¹⁴⁾

『東瀛詩選』では、卷十一のすべてが茶山の詩に充てられている。兪樾が『東瀛詩選』の中で、ひとつの巻をまるまる一詩人に充てるという扱いをしているのは、茶山の他には、卷三の服部南郭、卷十六の梁川星巖、そして卷二十三と二十四の二巻にまたがっている広瀬旭荘のわずかに三人だけである。このことから、兪樾が、我が国の詩人の中でいかに茶山を重視したかがわかる。

茶山の詩を論じるには、広瀬淡窓の言葉を借りるのがよい。淡窓は、その「儒林評」の中で、茶山の詩を次のように論じている。

茶山ノ詩ノ体ハ。六如二本ツケルモノナリ。六如ガ詩ハ。景多クシテ情少ナク。濃密ニ過ギタリ。始メ喜ブベシト

雖モ。後ニ厭ヒ易シ。茶山ハ情景相半シ 濃淡中ヲ得タリ 故ニ久シクシテ厭ハザルコトヲ覺ユ。但シ其初年ノ作ハ。風骨森然タリ。中年ノ後ハ。爛熟ニ過ギテ。其格大ニ下レリ。人其二稿三稿ヲ初稿ヨリモ勝レリト云フハ。詩ヲ知ラザル者ノ論ナリ。⁽¹⁵⁾

淡窓の六如と茶山に対しての評価は、現在にあつても、近世の漢詩人を考えるときには踏まえるべき評価である。例えば、富士川英郎はこの二人について、「概して言うならば、六如によって大胆にその道を切り開かれた宋詩風の写実主義的な詩は、茶山によって、情景を兼ねそなえた渾然たる境地にまで大成された⁽¹⁶⁾」と書いている。

富士川は、茶山の詩の特徴について、こうも言っている。「茶山はその生涯を郷里の備後国神辺にあつて、その四時の田園風景を歌つて倦まなかつた⁽¹⁷⁾。」

また、黒川洋一の「茶山は、平易なことばをもつて、日常卑近の生活のうちに題材を取り、滋味あふれる詩を作つた⁽¹⁸⁾」という言葉も、茶山詩の特徴をよく言い表している。内藤湖南が「独り菅茶山、卓然として時流に抜き、穩秀雅雋を以て、一家の面目を備へ、其の得意の候に至りては、往々神韻超朗、自然に絶調を成し、遙かに正亨諸大家に接踵せり⁽¹⁹⁾」と茶山の詩を絶賛していることから、茶山詩の評価の高さがわかる。

要するに、茶山詩は、日常的な身近な材料を詩の素材として詠み込み、その用語も平易な言葉を用いて、内容的には情と景が程よいバランスを保つたものとして仕上がっているところにその特徴があると言える。すなわち、このような詩の完成度や味わいの深さが、茶山の詩が教科書教材として歓迎された大きな要素であると考えられるのである。

さらに、茶山の詩が歓迎されたひとつの理由に、彼の教育者としての姿勢がありはしまいか。兪樾は『東瀛詩選』の中で「近世善教育後進者、於山陽則称茶山菅翁、於九州則称淡窓広瀬君、四方之士爭就其塾、皆有所成而後帰⁽²⁰⁾」と述べ、茶

山を、豊後日田の広瀬淡窓と共に教育者の双璧として並び称している。

現在、われわれは、茶山の教育の一端をその塾、すなわち廉塾の「廉塾規約」からうかがい知ることができる。⁽²¹⁾ そもそもこういう規約がどうしても必要になったかといえ、

まま心得違の人有之、色々の事出来候得者、今月一つ今年一つと制禁を立て候事ニ候者、然処書生衆段々入替り、其事未承知無之方も有之候様に相見へ候、仍而今度壺所にかき集め御目にかけて申候

こう茶山自身が言っているように、長年の塾経営の間に、塾生の中には「心得違の人」も出てきたために、その都度、禁止事項を設けてきたが、時の推移とともに塾生も入れ替わってそのような禁止事項も徹底しにくくなったために、それらをひとつに書きまとめて示すようにしたといういきさつがある。

まず第一に、塾は学問の場であるから、学問を身につけるための心構えが述べられている。

素読いたし候人日々かけぬ様に受け習ひ可被致候

素読は「日々かけぬ様」、つまり毎日欠かさずに行うことこそが学問を身につける上で必要不可欠の事柄であるとして、これを奨励する。

講釈・輪講有之候前に其書を熟覧いたし、席後に又再見いたし聞漏し候処ハ可被尋候

と、予習復習の大切さを説き、

詩文会者月に六度有之候得者其外妄に作るへからず、読書を第一に可被致候、詩文も読書にあらざれハ出来不申候物ニ候、六度ハかけぬ様に作らるへく候

と、月に六回ある詩文会に必ず詩を提出できるようにすることを義務付け、そのためにも読書が肝要であることを諭している。

また、学問を修めるには学ぶべき時期というものがあるということについて

物習ふへき月日を打捨候事自身の損とも可申候、凡人仕官の身者其勤向き有之、農商者其渡世の用事御座候得者、一生の中閑暇の時節二十前後のより外者無之候、此間を取逃し候てハ、家持候後も入湯参宮等二月三月の隙ハ有之候へ共、一年二年の閑暇者無之者ニ候、其大事の時節を無用の慰ミ事になし果し候者誠に大なる其身の損ニ御座候というように、二十歳前後の時期こそが、世事にも縛られずに学問に打ち込むことのできる最適の時であることを強調している。

そして、学問を修める環境に身を置くことができる幸福については、

一郷一村に幾千百人か住居いたし候得共、其間に読書致させ候親兄ハ稀なる者ニ候、偶左様の親兄を持候人ハ其身の大幸に候得者、其心を無下にいたし候も扱々心なき事に御座候

と、塾生たちが学問に対して理解ある保護者を持ったことへの感謝の念を持つことを改めて強調している。さらに特徴的なのは、茶山が塾生たちに求めた生活面の規律が、こと細かに記されていることである。

読書に倦ミ候とて立騒き相撲どり被致間布候

おそらく、読書に対する集中力が落ちた塾生が、立ち騒いでもったり、相撲をとったりすることがあったのであろう。こんな文言を注意すべき事柄として記してあるところから、当時の塾生たちの様子が生き生きと浮かんでくる。

後輩幼学の人を者年長の人随分いたわり、行儀等をしへ候様にいたし、かり初二もなふり候様の事ハ被致間敷候

塾生間の人間関係についても気を配りながら、年長者や古参の塾生が後輩をよりよい方向に導くことを塾経営の方針としていることが感じられる。

また、そういう年長者等の塾内のリーダー的存在の塾生に対しても、何事に対しても自身を律しながら臨むようにと、茶山は次のような注意をすることを怠っていない。

年長又ハ学事成り候て衆人も遠慮いたし候様の人ハ、自身より其心得有之、随分乗りの参らぬ様可被致し氣候

常日頃から塾生相互の人間関係作りにも細かな配慮していた茶山であったが、人間関係にはとかく行き違いや摩擦はつきものである。それが、活動が盛りの年齢層の子供たちであればなおさらだろう。このような点は、現代の学校の教室も同様である。他の塾生から何かしかけられても、極力相手にしないでおくようにと、そういう場合の対処方法を言いながらも、塾生間ではどうしても自力解決が困難な状況が発生したときには「主人」、すなわち茶山の出番となる。

人より無理を申かけ候か、或ハ不作法いたしかけ候時ハ、其相手にならす大抵堪忍可被致候、堪忍なりかたき事を者其まま主人へ可被申出候、凡戯謔過て礼なけれハ後者争になり候

おそらく、双方の言い分を聞いたりしながら、彼らの言動に対して戒めたり諭したりして、調停役としての茶山が、問題解決のための方向性をつけたのであろう。

こんな場面を想像すると、経書や詩文を教える茶山よりも、年若い塾生たちに対して、しつけ面をも重視しながら学問の伝授にもまして、彼らの親代わりになって日々の面倒を見ながら教育活動を行う茶山の姿が浮かんでくる。⁽²²⁾

このように見ていくと、教育者茶山の姿というものが、大きく浮かび上がってくる。こうした教育者としての茶山像は、その詩を教科書教材として取り上げる際の肯定的な要因に含めて考えてもよいのではないだろうか。

六 おわりに

ここまで、明治から現在まで、菅茶山の詩が数多くの漢文教科書教材として採られてきた経緯には、いくつかの要因が考えられることを見てきた。

何よりも、茶山の詩そのものの味わい、内容的な良さが評価されてきたということが大きい。また、ひとつには、茶山が長年にわたって塾生を教えてきた茶山自身の教育者としての姿勢が好ましく感じられたことも、可能性の中に含まれる。しかし何よりも、明治期から昭和終戦期に至る我が国の方向性、すなわち、忠君愛国を学校教育のひとつの柱とする教育体制の中に、結果として茶山詩が組み込まれてしまったことが大きく関係している。

したがって、終戦を境にそのような教育体制が崩れ去ったとき、茶山詩の教材的な価値は大きく変動することになる。当然のことながら、終戦まで採られてきた「宿生田」詩は漢文教材としては姿を消し、戦後になって「冬夜読書」が奨学奨励の上から数多く採られるようになるのである。

すなわち、茶山詩が漢文教材としてふさわしいものと判断され、明治以来現在に至るまで教科書教材として採られて続いているものの、その教材的な価値という面から見ると、戦前と戦後とはまったく違った様相を呈していると結論付けることが出来る。そして、「宿生田」詩は、茶山が自身の詩集で編集した意図とは全く違った形で、教科書教材としての役割を果たしてきたことを、改めて発見する。

今後の漢文教材を考える上で、「宿生田」詩の扱い方は、検討の対象とされてよい。それは、戦前までの意図的な編集の下に置かれた作品であったが、その印象をいつまでも引きずるのではなく、詩の内容そのものの価値を考慮して、教材と

しての在り方を探ることである。たとえば、松尾芭蕉の『奥の細道』の「平泉」の部分は、現行の中学校教科書五社の全てに採られている。そこには、かつての古戦場を訪れた芭蕉が、時の流れと対比した人間の小ささ、はかなさに涙する場面が描かれているが、このようなテーマを設定して「宿生田」詩を教科書教材として再評価することも可能ではないか。そのような、詠史としての見直しを図り、生徒たちの感性をより豊かに育むための教材としての価値を「宿生田」詩に見出すことも、ひとつの可能性として考えられる。このような詩を足がかりとしながら、かつての価値観から開放された眼で、改めて我が国の歴史上の出来事に対して知識や感想を持つことは、教育上からも、決して無意味なことではない。

茶山の生活圏である神辺を題材にした「神辺駅」という詩がある。

黄葉山前古郡城

黄葉山前 古郡城

空濠荒駅半榛荊

空濠荒駅 半ば榛荊

一区蔬圃羽柴館

一区の蔬圃 羽柴の館

数戸村烟毛利宮

数戸の村烟 毛利の宮

この詩は、茶山が教育活動を展開した環境の一端がうかがえるばかりでなく、秀吉の毛利攻めの故事が髣髴とされ、詠史的な内容も含まれた作品である。このような詩を再発見し、教材化するのも意味あることではないか。

このように、かつて漢文教科書に採られた教材の見直しを図り、旧来の編集意図から一旦解き放ち、教材としての価値を再発見し、さらに、これまで省みられなかった作品の教材化を検討することは、今日行うべき急務であると考ええる。

最後に、拙稿を記すに当たって、青木五郎先生からは資料のご提供をいただいた。また、内容構成については、佐藤保先生、青木五郎先生の御教示に負うところが大きい。心より感謝申し上げます。

〔注〕

- (1) 拙稿「漢文教材としての広瀬淡窓」(『二松学舎大学人文論叢』第七十五輯)二〇〇五年
- (2) 稲岡勝「明治検定期の教科書出版と金港堂の経営」(『東京都立中央図書館研究紀要』第二十四号)一九九四年
- (3) 『官報』第八四三二号 明治四十四年七月三十一日
- (4) 色川大吉『近代国家の発現』(『日本の歴史』21)中央公論社 一九七四年

- (5) 菅茶山記念館『菅茶山略年表(草稿)』一九九八年 二〇ページの寛政六(一七九四)年の項には、次のようにある。

三・一五 妻門田氏宣・正二・大介・門田氏と『北上歴』の旅に出る、名越亭で送者と別れ、西山拙斎を鴨方に訪ね泊す

また、ここに登場する正二・大介・門田氏について、富士川英郎は、「正二・大介はともに神辺の塾生だろうか。門田氏は茶山の妻宣の実家の人と思われるが、父伝内なのかどうか」(『菅茶山』(上)二九五ページ 福武書店 一九九〇年)と言っている。

- (6) 富士川英郎『菅茶山と頼山陽』二四八ページ年譜 平凡社東洋文庫 一九七七年

- (7) 『大日本地名辞書』の「湊川神社」の項に、「楠公祠と称す、湊川東北五町許、多聞通橘通の間に在り。明治維新の初め特に詔旨を授け建祠し、楠公の忠烈を褒揚して天下の義氣を奨む」(元禄四年水戸黄門公の正成忠死の処に就きて建碑せるものにて、當時は湊川河畔一帯の田野なりしが、明治四年当社を創立せしより熱鬧の地となれり」とある。(吉田東伍『大日本地名辞書』第二卷 富山房 一九七二年再版)

- (8) 森鷗外『北条霞亭』(『鷗外選集』第九卷 四〇三ページ 岩波書店 一九七九年)

- (9) 石川忠久『日本人の漢詩』二九九ページ 大修館書店 二〇〇三年

- (10) 文部省『高等学校国語科指導資料 教材と指導法』一九六六年
- (11) 京都書房『高等学校の国語教科書は何を扱っているのか』一九九七年
- (12) 京都書房『高等学校の国語教科書は何を扱っているのか』二〇〇〇年
- (13) 『郷塾取立に関する書簡』（『広島県史 近世資料編VI』）
- (14) 佐野正巳編『東瀛詩選』汲古書院 一九八一年
- (15) 『淡窓全集』中巻 一八ページ 思文閣 一九七二年
- (16) 富士川英郎『六如と茶山』（『江戸詩人選集』月報2）一九九〇年 岩波書店
- (17) 前同書月報2
- (18) 黒川洋一『菅茶山・六如』（『江戸詩人選集』）三九六ページ 岩波書店 一九九〇年
- (19) 内藤湖南『近世文学史論』儒学上（『内藤湖南全集』第一巻 三十七ページ 筑摩書房 一九九六年）
- (20) 佐野正巳編『東瀛詩選』汲古書院 一九八一年
- (21) 「廉塾規約」は、現在『広島県史 近世資料編VI』（一九七六年 九五八ページ）に収められている。本稿の「廉塾規約」の引用は、以下すべてこれによった。
- (22) 『広島県史 近世資料編VI』の「廉塾規約解題」には、次のようにある。

塾の書生に対する父兄の期待と、学問ができる身の幸いを述べ、茶山もその期待にそうよう努力していること、また塾生に対する遠慮のない批判を求めるなど、学問という共通の目的に努力する集団としての、比較的自由な雰囲気の意味を強調していることなどが注目される。

なお、「廉塾規約」は、菅茶山記念館『教育者菅茶山』（二〇〇〇年）に、その口語訳が載せられている。